unicef
世界の子どもたちのために

ユニセフ兵庫ニュース

Wish

vol.41
2013年9月号

ユニセフ国際セミナーⅡ　ピアノ曲に合わせパフォーマンスする関西ブラジル人コミュニティCBKの子どもたち
（神戸市立海外移住と文化の交流センター）

CONTENTS

2-3 イベントレポートⅠ 地球のステージ2 公演＆トークセッション

4-5 イベントレポートⅡ ケニアキベラスラムの若者たち *Messages from KENYA*

6-7 活動ファイル 2013年4月～2013年8月

8 お知らせ

特集 ユニセフ国際セミナーⅡ

イベントレポートⅠ

公演 地球のステージ2

神戸での「地球のステージ」は8年前のこのホールから始まりました。今年は、国際協力の最前線で活動されている桑山紀彦さん、竹村彩花さんをお招きし、2部構成で行われました。

第Ⅰ部 地球のステージ

地球のステージは、世界で起きているさまざまな出来事を、大画面の映像とシンクロする音楽と語りでつづる公演です。今回のステージでは、回想篇、カンボジア篇、イラン篇、パレスチナ篇、未来篇、故郷篇が上演されました。

舞台には大型スクリーンと傍らに楽器を置き腰掛ける桑山さんの姿だけ。スクリーンに映し出されたアンコールワット、会場いっぱいに響き渡る歌声。こうして地球のステージは始まった。

回想～カンボジア篇

自分探しの旅先での少女との出会いから始まった国際医療活動。カンボジア難民キャンプでのボランティア。そして病院復興事業の誘いを受ける。そこでのカンボジア人青年医師の成長を通して、人を育てること、海外支援の意味を実感する。

イラン篇

2003年イラン南東部を地震が襲う。サッカー大会を企画。父の死に直面し、夢を失いかけた少年は現実に立ち向かう勇気を取り戻し、大人たちは失いかけていた誇りを取り戻した。スポーツは素晴らしい。

パレスチナ篇

ガザ地区のラファに地球のステージの事務所がある。「海を見たい」という少女たちの願いをかなえるべくガザの海へ。世界の国々とつながっている海は彼女たちに自由を感じさせてくれる大切な存在だった。

震災未来篇

桑山さんは、子どもたちの心の自由を取り戻すために被災地を巡った。忘れていくのを待つのではなく、向き合って勇気を出して乗り越えていく。子どもたちが出演する映画「ふしぎな石」も制作。命の大切さ・生まれた喜び・生きる幸せを伝える。

心の傷と戦うのは、大人も一緒。これから深まる一方の心の傷を癒すには語ることだ。被災地へ行かれたら「どうやって生き延びたの」と聞いてください。語りを促してください。

美しい自然、惨禍の現場、そこに生きる人々の映像は音楽や語りとシンクロし、心にしみ、目に焼きつき、会場の皆さんの胸を打った。

大勢を前に総合司会に初挑戦する
大学生 濱家翔さんと上野恵里さん

●Event Data イベント概要

日　時　2013年8月24日(土)
会　場　コープこうべ生活文化センター（神戸市東灘区）
主　催　地球のステージ神戸実行委員会
参加人数　280人
後　援　兵庫県生活協同組合連合会、コープこうべ、コープこうべ労働組合、コープこうべ定時職員協議会、兵庫県ユニセフ協会

※この公演は公益財団法人兵庫県国際交流協会の助成を受けています。

桑山 紀彦さん

医師。NPO法人地球のステージ代表理事。日本で診療を行う一方、パレスチナ、東ティモールでの海外支援事業、地震等の被災地での国際医療支援活動、「地球のステージ」公演など幅広く活動中。東日本大震災では自ら被災しながらも直後から診療を再開、被災者の心のケアを行う。

第2部 トークセッション「私たちにできること」

桑山さん、竹村さんのお二人に進行役の戸田さんを交え、会場からの質問も受けながらトークセッションは進められました。活発な意見交換の場になりました。

質問：学生時代に経験しておいて良かったと思うことはありますか。

桑山：自分探しの旅でフィリピンへ行ったとき、自分でも人のためになるのではないかと思う経験をした。人との出会いがすべてだった。

アルバイトをしていた大学生協では、世界や地域の事を真面目に考えている大人と出会った。お金、時間の使い方を工夫すれば、社会人になってからの方がやりたいことができる。そのためにも、いろんなところに顔を出して、物事をしっかり考えて、すそ野を広げて欲しい。

竹村：いろいろな国へ行き、さまざまな人と出会ったことは良かった。自分で考えると次の課題が見え、それが自分を高めることにつながるので、学生の時は何にでも手を出してほしい。

質問：社会人が今からでもできることを提案していただけますか。

桑山：人間は忘れる生き物だからこそ、被災地側は忘れられないように発信していくことが大事だと思う。被災地以外の皆さんには、折に触れ自分の心の中に芽生えた気持ちに正直になって行動に出てほしい。ティッシュ配りの人からティッシュを受け取ってあげたらその人は喜びますよ。それが、僕が願う事です。

竹村：カンボジアの女性障がい者は社会の底辺で生きている人たち。「CHA」は彼女たちがシルクの商品を作り、その売り上げで運営しているローカルなNGOです。今日、ブースにある商品を見てほしい。物販や聞いた話を伝えることは日本でもできる。伝え続けることで輪が広がって欲しい。

質問：学生時代に海外を訪れたとき、語学で困ったことはありますか。

桑山：英語は通じなかった。関係代名詞などは使わず一文ずつ表現しているうちに通じるようになった。

言語は基本英語にして、現場に行くと通訳さんがいて、通訳さんとは英語でやり取りし、現地の言葉で仕事をしている。ここで大切なことは、いくら英語ができても、通訳さんと仲良くなれないと仕事はできない。だからここにも人間関係の大切さ。

竹村：休学してカンボジアに行った時、会話ができないと何もできないと思った。私はカンボジア語を話せないと何も成り立たないので必死になって覚えた。

質問：命の危険を感じたことはありますか。また、危険な地域へ行くと知ったご両親はどうなさいましたか。その時二人はどうしましたか。

桑山：ガザでは死ぬ思いだった。空爆の恐怖で眠れなかった。ガザへ行っている間ずっとおふくろはお百度参りをしていたと聞かされた時は涙が止まらなかった。僕の場合は、人助けのために行くのではなく、自分の心に正直に動きたい、ということで今まで自分の行動を決めてきている。おふくろは多分それを分かっているのだと思う。

周りの人に迷惑をかけていることは分かっていても、自分にウソをつきたくない。そういう行動は分かりやすので、周りの人も後押ししてくれる。だから皆さん、恐れないで一歩を踏み出しませんか。JICAは69歳までシニアボランティアを募集している。一度しかない人生、彩りのある人生にしてみてはいかがですか。自分に正直に。

竹村：行くといった時、父親に反対されました。3か月間口を利いてもらえないまま行きました。帰ったときは、やることはやったという顔をして帰ってきたのか、父親に抱きしめてもらった。今は応援してくれています。

トークセッション進行役の戸田拓也さん

質問：ボランティアをするときの心構えを教えてください。

桑山：これでいいのかと疑問を持ちながらすることが大事。自分だけの視線で行動するのではなく、周りの人にも相談する姿勢が大切。

竹村：同じ目線で付き合うことが大切。対等な立場で、ボランティアという意識はない。（一部抜粋）

人に伝えるにはどうしたらよいか。成功をイメージして、アイディアを出し合いながらメンバーの気持ちを一つにし、モチベーションを上げていくことに尽きると思いました。当日のすばらしいステージをたくさんの方とともに見られる喜びは最高でした。ありがとうございました。（地球のステージ実行委員会）

竹村 彩花さん

関西カンボジアネットワーク（KCN）代表。2010年大学を休学し、カンボジアのローカルNGO「CHA」に長期滞在。現地の女性とともに生活しながらシルク商品の製作、販売を行う。現在は、会社勤務に就きながら、KCN代表として活躍、「CHA」の支援活動も続けている。

最初の歌、「ベレンベレ」はスワヒリ語で『前』という意味。
「私たちの体のすべては神様からもらった大切な宝物だから
そのすべてを生かし、一生懸命に生きていきます」
アフリカに誇りを持ち、アフリカが大好きな彼らの歌声と笑顔が会場を包んだ。

イベントレポートⅡ

Messages from KENYA

ケニア キベラスラムの若者たち

命がけで困難を乗り越え、
たくましく生きてきた
ケニアの若者たち。
生きる上での大切なこと、将来の夢。
イベントを通してかいま見た5人の生き様は、
恵まれた環境に暮らす日本人にとって
たくさんの大切なことを教わる
かけがえのない時間となった。
そんな彼らのメッセージをぜひ紹介したい。

● Event Data イベント概要

日　時　2013年5月25日(土)
会　場　コープこうべ生活文化センター
参加人数　120人
出 演 者

早川千晶さん
1966年福岡生まれ。世界放浪の旅の後、ケニアに定住。現在、マゴソスクールの運営に携わる。

大西匡哉(まさや)さん
神奈川県出身。ケニア在住8年のパーカッショニスト。映像作家。マゴソスクールの子どもたちのCD制作に携わる。

? マゴソスクールとは

ケニアの首都ナイロビの中心街から車で10分の所、100万人の貧しい人々が暮らす世界最大のキベラスラムの中にある学校。1999年、スラムの長屋の一室に20人の孤児を集めスタート。現在は、困難な状況を抱えながらも学校へ行きたいという願いを持つ幼稚園から8年生まで約500人の子どもたちが学ぶ。今、1回2円朝食や10円給食にも力を入れる。さらに、高校卒業後の子どもたちのための洋裁や木工の職業訓練も行っている。

大切な思いは実現できる。

リリアン・ワガラ
1970年生まれ。マゴソスクール創始者。

20歳の時、両親が亡くなり、幼い弟や妹の親代わりになって生きてきました。キベラには孤児がいっぱいいました。女の子たちは子守りや洗濯。男の子たちは泥棒や麻薬の運び屋をさせられました。私は子どもたちを助けたいと思い、学校を創ることを決めました。お金は全くありませんでした。でも、私は「心の中の大切な思いは、言葉にすると実現できる」ということを信じていましたから、声をかけることから始めました。

それから、たくさんの子どもたちの人生を変えてきました。今では、500人の子どもたちが勉強し、一日3回のご飯が食べられます。これは、キベラでは夢のようなこと、難しいことなのです。今、女の子の教育に力を入れています。

子どもの未来を支えたい。

ドリス・アウィノ
1993年生まれ。卒業生。マゴソスクールボランティア。

5歳の時に両親が離婚し、お母さんは5人の子どもを置いて逃げました。漁師のお父さんを助け働きましたが、お父さんは病気になりました。ある日、村の女の人が来て学校へ行かせてあげると言って、私をキベラスラムに連れて行きました。私は家事や子守りをさせられ学校へは行けませんでした。私は逃げる決心をしました。助けてもらったのがリリアンでした。

今、私はマゴソファミリーの3人の子どものお母さんです。うち2人はエイズにかかっています。私がどう接するかで、子どもたちの未来が大きく変わります。子どもたちには自分の目標になる人、尊敬できる人が必要です。私にとっては、それがリリアンです。将来の夢は学校の先生になることです。

人は必ず人の役に立てる。

ザブロン・オオコ
1993年生まれ。卒業生。アートクラブ会長。

ハンサムな男の子が生まれました。彼が6歳の時に両親は死に、エイズだと言われ村八分にされました。家畜小屋での生活が始まり、汚い子だと言われ、つらくて村を出ました。森の中で草や木の実を食べ、ずっと隠れて暮らしました。もしも、人間に会ったら、ひどい目に合わされると思ったからです。ある日、男の子は歌声が聞こえる方に行きました。教会の人たちは男の子を見て叫んで逃げましたが、牧師だけは男の子の体を洗い、髪を切り、それから、マゴソスクールへ連れて行ってくれました。

僕は卒業し、絵を教えています。あの頃の僕は、言葉で自分を表現できませんでした。でも、絵を描くと絵が言葉に変わりました。言葉で表現できない人たちのために、絵を教えていきたいと思います。

母の歌が、生きる希望に。

ヘゼカヤ・オギラ
1986年生まれ。教頭先生。

僕が8歳の時、母は「人生は自分で変えなければならないよ。その荷がすごく重たいなら歌いなさい。私の息子よ。前に向かって歩きなさい。必ずたどり着けるから」と、言いました。母は自分が死んだ後に、子どもたちがどう生きていけばいいかの準備をしたんです。母が亡くなってから、小さな弟たちとお腹をすかせ、肩を寄せ合い暮らしました。歌は痛みや悲しみと一緒に、いつも僕たちの胸の中にあります。

その後、マゴソスクールでボランティアとして働き、先生になりました。自分の経験を語り、子どもたちと痛みを分かち合う。すると、生きていく勇気がもらえる。温かい人間同士のぬくもりの中で本当の仲間に出会える。そんな思いで生徒たちを育てています。

分かち合う大切さを友から学ぶ。

コリンズ・オドンゴ
1995年生まれ。初代生徒会長。現在、OGOBクラブ会長。

高校に進学した後、1年以上病気で休学しました。その時に出会った友達ブルックスは、小さい時、目の前で強盗にお父さんを銃撃され、彼もお腹に弾を受けました。それ以来、彼には突然気を失い倒れるフラッシュバックという症状が出ました。ある時、彼が「僕の心の中はどうしようもなく苦しいんだ」と、打ち明けたんです。僕は、「言いたいことは全部言えばいい。泣きたいことがあれば泣けばいい」と、言ったんです。すると、彼は大きな声で泣き、僕も一緒に泣いて叫びました。彼も僕も元気になっていきました。しばらくして、彼は、一番大切な宝物のスワヒリ語の教科書を僕に渡して転校していきました。

ケニアの諺(ことわざ)に「友達というのは兄弟よりもずっと近しいものだ」というのがあります。

5 竹本会長と歩く「広島ピースウォーク」

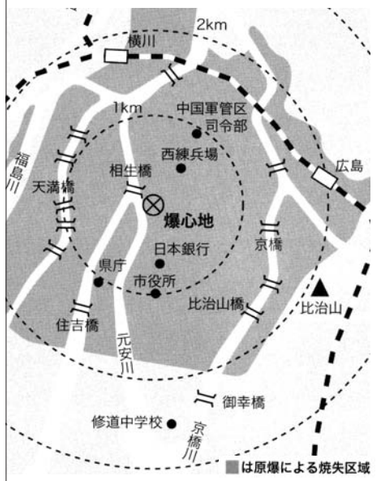
日 時　7月14日（日）
主 催　兵庫県ユニセフ協会

原爆投下により悲劇の惨状と化した
「ヒロシマ」で被爆しながら、
今なお、元気に活躍されている
兵庫県ユニセフ協会の竹本成徳会長と
ゆかりのモニュメントを巡り、
平和の尊さについて考えました。

平和記念公園にて
参加者35人のピースウォークは比治山展望台をスタートに、原爆ドーム→平和記念公園→日赤病院→市役所→旧日本銀行→袋町小学校と訪ねた。

原爆の脅威

1945年8月6日投下された原爆は、地上580メートルの上空でさく裂、爆心地周辺の地表面温度は3000～4000℃に達し、熱によって膨張した空気は爆風となって広がり、人々は重いやけどを負い、その体は吹き飛ばされ、たたきつけられました。爆発が収まると、中心部に上昇気流が発生し、放射能に汚染された黒い雨を降らせ、きのこ雲を作りました。



コープ出版提供『さいごのトマト』より

生存率1%

会長は、中学2年生の時、爆心地から1kmのところにある市役所西側の日陰になった植え込みの中で被爆し、その場で気絶。目覚めると、風景は一変し、暗闇の中に廃墟となった町が広がっていました。覚悟を決め、炎に覆われた街を離れることに。比治山にたどり着き振り向くと、地からわき上がる様々な色をしたきのこ雲が見えました。
その後、爆心地から1kmで被爆した人の生存率は1%と知らされました。黒い雨にも直接当たらなかった会長は、リタイアしたら被爆体験を伝えたい、その使命があると自覚されたそうです。

会長は、平和の大切さ、戦争の恐ろしさを身振り手振りで精いっぱい語りかけてくださいました。

旧日銀広島支店地下金庫前では、倒れていた娘を救い出し、その後亡骸（なきがら）をわが手で荼毘（だび）に付すことになった父親を例えて、惨状で見た親の愛情、親の覚悟についてお話し下さいました。

袋町小学校は、爆心地から460mにあり、すさまじい爆風と高熱により廃虚となりました。朝会のため校庭に出ていた1,2年生と教師は、ほぼ全滅。学童疎開中の3年生以上の児童の多くは孤児になりました。進学を諦めざるを得ない子どもたちもたくさんいたそうです。

お話の中に出てくる生々しい光景、全裸で皮膚は焼けただれぼろ雑巾のように垂れ下がった人々のさまよう姿、熱さから逃れようと川に入り死んでいく姿、腐乱した死体で埋め尽くされた川に入りわが子を探す親の姿、その時々の匂いや心の痛みまでもが伝わってくるようでした。

比治山展望台にて

旧日銀広島支店地下金庫前にて

Voices 参加者の声　平和への思い

- ヒロシマには何万、何百万の悲劇があり、平和の大切さを伝えるためにも常に話題にすることが大切である。
- 平和は当たり前ではない。
- 敗戦後68年、戦争の実相が忘れ去られようとしている今、事実を知ること、知らせることの大切さをあらためて感じた。
- 文明の両刃の剣を子どもたちが気付くような取り組みをしていかなければならない。
- 今もどこかで戦争のために大変な経験をしている子どもたちに、一日も早く笑顔が戻りますように。

2 「めだかの学校」でユニセフを身近に

日 時　7月21日（日）
会 場　西宮市環境学習サポートセンター
（西宮市甲風園コープこうべゆとり生活館アミ1階）

環境美化の大切さを楽しく学べる「めだかの学校」が開かれ、大勢の親子連れでにぎわいました。同館にあるユニセフコーナーも、クイズや風車と身近な牛乳パックを使ったキューブ作りの工作コーナーに参加。「ユニセフのマークのこの輪、な～んだ？」「え～、オリーブなの」「できた！」夏休み最初の休日、ユニセフを身近に感じてもらう一日になりました。

3 福島の子ども保養プロジェクト in よしまキャンプ

日 時　7月28日（日）～8月1日（木）
場 所　香川県余島　神戸YMCA余島野外活動センター
共 催　コープこうべ/神戸YMCA/兵庫県ユニセフ協会

福島県の小学4~6年生の子どもたち33人を招待してキャンプが行われました。
瀬戸内海の小島で、海水浴、カヌー、カヤック、釣りなどの海遊びや初めてのアーチェリーにも挑戦。大自然の中で友達やリーダーと思いっきり過ごした5日間は、子どもたちにもボランティアの学生たちにも思い出深い夏休みになりました。

4 ユニセフパネル展 ユニセフによる戦後日本の子どもたちへの支援

日 時　8月20日（火）～29日（木）
会 場　コープこうべ生活文化センター

日本は、第二次世界大戦後の1949年から1964年までの15年間にわたりユニセフの支援を受け、その支援総額は当時の金額で65億円にもなりました。
衣料用の原綿は、子ども用の下着や衣類に加工され、貧しい家庭に配布されました。
粉ミルク（脱脂粉乳）は、飲んだ子どもたちの成長に効果があることを確認したうえで、給食用の粉ミルクとして全国に広がっていきました。

Activity File 活動ファイル

兵庫県ユニセフ協会の活動履歴

2013年5月～2013年8月

活動一覧 Activity List

学習会訪問活動一覧

月日	訪問先	対象	人数
5月 18日	香櫨園社会福祉協議会	大人	42
6月 21日	三木緑が丘コープ委員会	大人	25
6月 22日	ユニセフボランティア入門講座Ⅱ	大人	29
6月27日	西宮市立甲陵中学校	中学1～3年	1000
7月6日	関西ブラジル人コミュニティ（CBK）	小・中学生	58
8月5日	夏休み「あそびっ子ウィーク」	小学1～6年	40
8月20日	神戸市西区あさひ児童館	小学1～6年	70
8月26日	コープ西宮東「こうべ親子塾」	小学1～5年	28

地域活動一覧

月日	イベント名	
5月19日	神戸まつり	
7月13日	コープこうべ第3地区平和のつどい	※
7月21日	めだかの学校（西宮市）	
7月28日～8月1日	福島の子ども保養プロジェクト inよしまキャンプ（香川県余島）	
8月3日	ユニセフ国際セミナーⅡ（神戸市中央区）	※
8月6日	コープ三木緑が丘平和のつどい	※
8月29日	コープこうべ平和集会（神戸市中央区）	※
8月31日	コープこうべ第4地区平和のつどい	※

※ ユニセフ製品を頒布しました。ご協力ありがとうございました。

1 ユニセフ七夕ネットワーク学習会

日 時　7月13日（土）
会 場　広島県民文化センター

四国・中国・近畿地方で活動する7つのユニセフ協会が合同で行うユニセフ七夕ネットワーク学習会も今年で8回目を迎えました。第一部は兵庫県ユニセフ協会のルワンダツアー報告、第二部はワークショップ「命をつなぐ水、命をうばう水」、第三部はワールドカフェ形式での情報交換が行われました。兵庫県ユニセフ協会からは15人が参加、これからのユニセフ活動に向けての充実した学習会になりました。

基調講演
日本で暮らして

松原 マリナさん
2001年　NGO「関西ブラジル人コミュニティ」設立
2007年　NPO法人「関西ブラジル人コミュニティCBK」設立 理事長
　　神戸市外国人市民会議委員他兼務
2013年　兵庫県国際協力功労賞 受賞

―　25年前の2月に来日しましたが、札幌は寒かったですね。
4月、長女の入学式の日。先生の話が始まると長女が『ワーッ』と泣き出したんです。何言っているか言葉が分からなかったのでしょうね。今、思い出しても涙です。それから、長女が持って帰るたくさんのプリントには何が書いてあるか全然分かりませんでした。参観日も懇談会も嫌でしたが、一番嫌だったのが末っ子の公園デビュー。仲間のお母さんたちが話している。その子どもたち同士で遊んでいる。なかなか入れなかったですね。

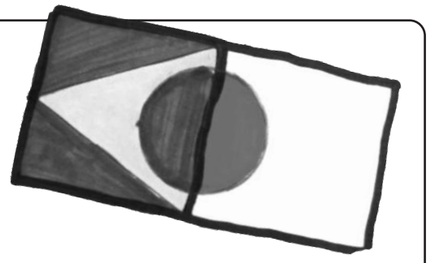
―　その後、岡山に行きました。私は社宅のママさんバレーに入り、日本のお母さんたちとの付き合い方がすごく変わったんです。先生に勧められてPTAに参加することができました。そこで、やっと札幌の学校のことも少し分かったんです。先生たちは、勉強もいろんな方法で支援してくれました。
　私たち外国人には、習慣・言葉の違いは厚い壁。それに慣れるまでにすごく時間がかかります。

―　神戸に来て、学校のボランティアを始めました。来日して間もない子が、遠足の時にタッパーにスパゲッティをいっぱい入れて持って来たんです。みんなはかわいい弁当で、違う形をしていましたから、すごく恥ずかしがって、ひとり後ろの方へ行って食べていました。そんな気持ちというのは、体験してみないと分からないのです。

―　CBKの活動を始めるとき、私が悩んでいると、長女が「お母さんが一番分かっている。ブラジルの子どもたちのこと。絶対諦めたらだめよ」と、背中を押してくれました。

―　CBKの子どもたちには自分の力で何がしたいか、何ができるか、やる気をもって考えてほしい。将来は、CBKがなくてもいい日本の社会になってほしいです。それが、私の希望です。　（一部抜粋）

ユニセフ国際セミナーⅡを受けて



外国籍の子どもたちが
共生できる社会づくりを考える

マリナさんは、「大人はいいんです。来日して1か月経つと、弁当屋さんでご飯やおかずを作ると給料がもらえます。子どもたちの1か月はどうでしょうか」と、私たちに問いかけた。

両親は日本人が働かない深夜労働。子どもたちは兄弟だけで一晩中過ごすこともあり、幼い弟や妹の子守りのため学校へも行けないこともある。早朝帰宅する父親とすれ違うように職場へ行く母親。子どもたちは学校へ行っても先生や友達の話す日本語は分からず、教室の中でじっと座っているだけ。家庭では親はポルトガル語。学校の勉強も見てやれない。外に出て遊ぶこともなく、コンビニへの買い物だけ。地域での人間関係は全くつくれない。もともと、ブラジル人は陽気で誰とでも挨拶し、よくしゃべる。しかし、日本での生活は、違いを我慢するところから始まる。

参加者Aさんは、「長女は15年前に日本に来て、言葉が十分でないために中学校でいじめに遭いました。現在は、結婚して子どもができブラジルに帰っていますが、『自分の子どもはブラジルで育てたい。日本の学校へは行かせたくない』と言っています」と、話した。友達から笑われて日本語を覚えたという思春期のつらい経験。外国籍の子どもたちがいじめに遭遇する、不登校になる確率は高い。

マリナさんは、「先生や大人の関わり方で子どもたちの成長の違いが感じられる。日本語指導や学習への具体的な支援と共に、ブラジル人としての子どもたちの良さや環境の違いを理解してほしい。保護者との連携にはポルトガル語の出来るボランティアのサポートが不可欠」と、強調した。そのことを学校、地域、そして私たちは理解してきたか。支援体制があるのだろうか。

子どもたちの貴重な成長の日々は待ってはくれない。少しでも早く、子どもたちの声や意見を聴き、最善策が実行されることを望む。外国籍の子どもたちが日本で十分な教育を受け、地域の中で安心して暮らせる社会を成熟させることが求められる。

中学3年生のG君が描いた半分がブラジル国旗、半分は日本の国旗の絵は、「日本で学んだ僕は、互いの文化を理解し、共に生きる社会をつくる担い手となる」、というメッセージに思える。　（福谷真知子）

特 集
ユニセフ国際セミナーⅡ

みんなが受け入れられる社会に向かって

～関西在住ブラジル人の子どもたちの今～

● Event Data イベント概要
日　時　2013年8月3日（土）
会　場　海外移住と文化の交流センター（神戸市中央区）
参加人数　86人

1908年、第1回の移民以来、政府の施策としてブラジルへ移住した人はのべ30万人。
1989年、外国人労働者確保のため法改正が行われ、安い労働力として日系ブラジル人3世・4世が日本へやって来ました。現在、定住しているブラジル人の数は約35万人とされます。その子どもたちの多くは地域の公立学校へ通っています。しかし、言語・習慣・文化の違いは高いハードルとなり、地域での人間関係がうまくつくれないのが現状です。子どもたちは、将来の夢や希望までも見えにくくなってきています。
グローバル化は加速し、今後、定住する外国人はさらに増えていくでしょう。互いの文化的な違いを認めつつ、共に生きる良い関係をどうつくるか、という大きな課題も見えてきます。外国籍の子どものたちが抱えている問題を見つめ、彼らが社会や学校の一員として豊かに暮らしていけるために必要ことを探りながら、誰もが受け入れられる社会の在り方を考えました。

Voices 参加者の声　共生への思い

以前から一度行ってみたい建物でした。よく知らなかった日本での外国人の子どもたちのお話。知ることがいっぱいでした。言葉、文化の壁を越えて、日本とブラジルの未来に向かって活躍する子どもたちがたくさん出てくることを期待します。

（上）2009年にブラジル移住100年を記念し、改修された海外移住と文化の交流センター。
　　25万人の移住者が神戸港から南米に向かった。
（中）ブラジルのこと、子どもたちのこと、多様な意見交換ができたグループディスカッション。
（下）赤津ストヤーノフ樹里亜さんのピアノのコンサートと小出野夕梨さんのダンス。

ユニセフ募金 *Donations For Unicef*

通常募金

通信欄記載事項	振替口座	手数料
K1-280兵庫	00190-5-31000	免除

緊急・復興募金

	通信欄記載事項	振替口座
アフリカ干ばつ	アフリカ干ばつ K1-280兵庫	00190-5-31000
シリア	シリア K1-280兵庫	00190-5-31000
自然災害	自然災害 K1-280兵庫	00190-5-31000
人道危機	人道危機 K1-280兵庫	00190-5-31000

*共通口座名義:公益財団法人　日本ユニセフ協会
*手数料免除

あなたもボランティア! *Volunteer*

ユニセフっていう言葉は知っているけれど、どんな活動をしているんだろう。世界の子どもたちのために、私のできることはなんだろう。「できる人が　できることを　できる時に」活動しています。お気軽にご連絡ください。

ユニセフ兵庫ニュース Wish vol.41 2013年9月号

ユニセフ兵庫ニュース Wish
2013年（平成25年）9月発行
発　行：兵庫県ユニセフ協会

住　所：〒658-0081
神戸市東灘区田中町5-3-18
コープこうべ生活文化センター4F
電　話：078-435-1605
ＦＡＸ：078-451-9830
（お問い合わせは平日の10:00〜16:00）

●最新の情報はホームページで
http://www.office-bit.com/unicef-hyogo/
兵庫県ユニセフ協会　検索

●兵庫県ユニセフ協会への案内図

Join Us 主催イベント

国際理解講座

国際理解講座⑥
玉本英子さん報告会「シリアの今」

会場:コープこうべ生活文化センター4階第3会議室
日時:11月30日(土)13:30〜15:30

玉本英子　東京都出身。アジアプレス大阪オフィス所属。デザイン事務所を退職後、ビデオ取材を始める。クルド、コソボ、アフガニスタン、シリアなどをビデオ中心に取材、発表。

戦闘で道路が寸断され、小麦粉が届かない。主食のナンが不足し、市民は毎朝2-3時間並んで買う。

国際理解講座⑤
マリールイズさん講演会「学ぶよろこび」

日時:10月19日(土)13:30〜15:30
会場:コープこうべ生活文化センター4階第3会議室
ルワンダ内戦を生き延び、福島県を基点に活動を続けるマリールイズさんが、未来をつくる子どもたちに向けて送るメッセージです。

国際理解講座⑦
アフリカの今、そして過去から学ぶ

日　時:12月14日(土)13:30〜16:00
会　場:コープこうべ生活文化センター
ジャーナリスト大津司郎さん、拓殖大学甲斐信好教授をお迎えします。学生によるルワンダツアー報告もあります。

※国際理解講座は公益信託兵庫県婦人会館ユネスコ基金の助成を受けています。

ユニセフバザー

日時:11月16日(土)
会場:コープこうべ生活文化センター1階
収益はユニセフ募金になります。

第35回 ユニセフ ハンドインハンド街頭募金活動

日時:12月23日(月・祝)　11:00〜13:00(予定)
ユニセフ　ハンド・イン・ハンド募金は、みなさま一人ひとりがボランティアとして参加できる身近な国際協力活動です。一緒に募金を呼びかけてみませんか。

お申し込み、お問い合わせ先　事務局 **078-435-1605**

BOOTH 出展参加

10/26(土)、27(日)	きょうどう学苑祭(三木市協同学苑)
11/2(土)、3(日)	兵庫県ふれあいの祭典(尼崎の森中央緑地)
11/4(月)	2013ユニセフカップ西宮国際ハーフマラソン
11/9(土)、10(日)	ひょうご教育フェスティバル(神戸市)
11/30(土)	にしのみや ふるさとウォーク2013

ユニセフ・カードとギフト 秋・冬号2013

クリスマス、お年賀、バレンタインデー、卒業・入学の気持ちに変えてユニセフ製品をお贈り下さい。

賛助会員募集中!!
ユニセフひょうご サポーター

ご支援いただいた皆さま(団体会員)

兵庫県仏教会、神戸YWCA、賀川記念館、コープ住宅(株)、(株)デイズ、(株)協同食品センター、(株)ビジネスコンサルタント、カネテツデリカフーズ(株)、おひさまエナジーステーション(株)、共栄火災海上保険(株)神戸支店、日本ボーイスカウト兵庫連盟、兵庫県生活協同組合連合会
ご協力ありがとうございます。